



# 高橋尚子さん 民主化への光を探して

in ミャンマー

ケニアの子どもたちに靴を届ける活動を続けてきた高橋尚子さん。もっと開発途上国で暮らす人たちの力になりたい。そんな思いで、JICAオフィシャルサポーターに就任したのは昨年9月。その第一歩を踏み出すべく、1月にミャンマーを訪問した。

国立リハビリテーション病院で、リハビリ中の人たちと話をした高橋尚子さん。ミャンマーはシャイな人が多いといわれるが、「Qちゃんスマイル」の効果だろうか。みんなの顔には自然と笑顔があふれていた



## JICAオフィシャルサポーター 就任初の途上国訪問

「あーみんなで準備運動をしましょうー！」

1月下旬、ミャンマーの首都ヤンゴンにあるヤンゴン体育学校。グラウンドに整列する学生たちに明るく声をかけるのは、JICAオフィシャルサポーターの高橋尚子さん。シドニー五輪でゴールドメダルを切った時のさわやかな笑顔は、数年経った今でも記憶に新しい。

高橋さんは現役引退後、2009年からケニアのスラムで暮らす子どもたちに靴を届けたり、東日本大震災の被災地でスポーツ大会を開催するなどの社会貢献活動が続けてきた。この3年、困難な状況に直面しながらも懸命に生きる姿にふれるうちに、もっと多くの人の力になりたい。そんな思いを強めていた。そして

ろう学校では手話で子どもたちと交流。「耳が不自由でも、手話という言葉でコミュニケーションできますね」



した高橋さんは、「私も毎日努力を続けて、世界一になることができました。だから一緒にがんばりましょう！」とエールを送っていた。

さらに、首都から飛行機で約1時間、第二の都市として知られるマンダレーへ。乾燥地帯で水資源の確保に悩まされてきたこの地域で、JICAは06年から「中央乾燥地村落給水技術プロジェクト」を実施。新しく建設された井戸を使う人々に「井戸ができてどのよう生活が変わりましたか」と高橋さんが問いかけると、「きれいで安全な水が近くで手に入るようになり、何時間もかけて水くみに行く必要がなくなった」とうれしそうに話してくれた。プロジェクト終了後も

村民たちによって適切に井戸の維持管理が行われていく様子を見て、「日本の支援が現地の人に確実に受け継がれている点、何より意義のあることだと思う」と感動していた。

そして高橋さんの強みといえば、何と言っても「マラソン」を通じた国際協力。今回のミャンマー訪問でも、ヤンゴン体育学校の学生やナショナルチームの選手たちと汗を流した。「軍事政権時の影響からか、オリンピックの存在を知らない人もいます。でもミャンマーの人たちは勤勉。これからどんどん強くなると思います」と期待していた。オリンピックの金メダリストである高橋さんからアドバイスを受けながら、真剣な目で練習に励む選手たち。彼らは国から経済的支援を受けているが、毎月家族への仕送り姿に、私たち日本人が忘れがちな心の豊かさを感じたという。

1週間の視察を通じて、たかさんの発見があったという高橋さん。「日本人が世界中の現場で活躍していることを誇りに思います。人と、国と、世界がつながる大切さをあらためて実感しました。JICAオフィシャルサポーター高橋尚子の国際協力。これからの新たな広がりを楽しみます。」



陸上のナショナルチームと交流した高橋さん。その爽やかな走りは健在だ



マンダレーでは地域の人たちと一緒に水くみ。毎日の生活に欠かせない「命の水」の大切さを実感した

ンゴン市内にあるろう学校。社会福祉制度が行き届いていないミャンマーで、JICAは06年から手話通訳者の育成などに取り組んでいる。国語や算数などの通常科目のほか、自立支援の一環として実施されている裁縫の授業も見学した高橋さん。覚えてのての手話で「勉強は好き?」「将来の夢は何?」などと子どもたちに話しかけると、「手話を勉強して、家族といろんな話ができるようになったんだ」「将来はエンジニアになりたい」と元氣な答えが返ってきた。「障害があるために家にこもりつきりだった子どもたちが、学校に来ることで夢と希望を持つことができた。目の輝きがとても印象的です」と話した。

## 現地の人たちと 共に行う国際協力

続いて、ヤンゴン市内にある国立リハビリテーション病院に向かった高橋さん。08年から「リハビリテーション強化プロジェクト」を通して、JICAが理学療法士の訓練などに取り組んでいる施設だ。プロジェクト開始から4年、リハビリテーション技術の向上により治療が効果的に行えるように。受け入れ数も順調に伸びをみせているという。脳性まひや脊髄損傷のリハビリの様子を視察



ろう学校で学ぶ子どもたちを見て「日本の子どもたちもこれぐらい元気がなきゃ!」と高橋さん